

二十年から三十年に向かう新年に

会長 飯田 精鷹

千代田の松を仰ぎ、翩翻とはためく
会旗、志を抱いて立ってから二十周年、
今、茲に三十年に向ふ新しき年を迎へ、
めぐる星霜に感無量のものがあります。
回顧すれば、みる夢は、楽しかった
行事、美しい景観、ロマン渦巻くドラ
マいっぱいであります。

吟の教場は故郷、私達の家庭に次ぐ
安全にして、祈りと命の安心の場であ
ります。かかる場を皆が集まり、作り
育てて来しました。皆さんのお力に心か
ら敬意を表するものであります。

さて、世はまさに日進月歩の世であ
り、芸能界のみならず、各界とも、世
交代は世の習いでもあり、吟とて諸
般の勢から、新しい文化、新しい人
へと、生々発展する秋でもあります。

新しき酒は新しい皮袋に盛れとか、
大正末生まれと、昭和初期生まれの所
謂、大昭群団から、いよいよ昭和十年
代生まれの盛年群団へと、登場の期で
あります。

新進気鋭の群団中、鈴木龍成さんは、
創立の頃からのメンバーの一人でもあ
り、業務推進委員長としても、千代田
の企画構成の中心でありました。水陸
両秀の人であり、ハザマ教場長として
も、その敏腕と徳のある人柄で指導を
されてきました。

諸生の推薦する人徳の人であり、所
謂、藤原正彦氏の言う、千代田の目す
る、品格の人でもあります。

山河はや

冬かがやきて

位に即けり

飯田 龍太

新会長としてご推薦申し上げ、よろ
しくおひきまわし、願います。
さて、愈々三十周年に向かつて雄々
しく進発、また新たに第一歩を踏み出
すわけであります。
噫、堂々の新装なれる「千代田」の
船出であります。
新春にあたり、その喜びと栄えを共
に祝する次第であります。



平成十九年度昇任審査指定吟題

初伝

感有り

江村晚眺

山崎 闇斎
戴 復古

中伝

桜祠に遊ぶ

秋風の引

短歌 天の原

ゆく秋の

奥伝

山中の月

復愁う

俳句

夏草や
古池や

皆伝

岳陽楼に登る

遊子吟

杜 甫
孟 郊

藪 弧山
杜 甫
松尾 芭蕉
松尾 芭蕉

広瀬 旭荘
劉 禹錫
阿部仲麻呂
佐々木信綱

会長を拝命して

会長 鈴木 龍成

この度図らずも、栄光ある当千代田岳精会の会長を拝命いたしました鈴木龍成でございます。

偉大なる会創始者、飯田精鷹先生が二十一年間に亘って築いて来られた数々の財産を、今後如何にして継承していくか、責任の重さを痛感しております。非力な私とすれば、会員の皆様のご協力こそ全てなりと思っております。

去る十月二十九日（日）に行なわれた「千代田岳精会 創立二十周年記念吟道大会」における会員の結集力は目覚ましいものがあり、その感激の余韻は未だに新しいものがあります。千代田“の底力をあらためて感得した次第です。

二十年という、これまで刻んできた歴史から、新たな創造の歩みをスタートすることになります。私はこの歩みは希望多きものがあると確信しております。何となれば、それぞれの教場の吟に励む取組み、教場相互の情報交換にもとづく密なる連携、これは極めて強力な結束であり、他に類を見ないものがあると思われまします。お互いの研鑽の中から生み出されてきた吟友の輪の拡大も見事な成果です。

私は、今後の会運営にあたって次のことに留意してまいりたいと思っております。

一、会の核である「教場」が、それぞれの特徴を活かして平生の研修を運営できる体制づくりのバックアップをすること。

二、吟の基本を身につける研修を充実させること。

三、会の一層の発展のため、吟友の増加に積極的に取り組むこと。

現状の教場活動の「足場」（場所）は、決して安定しているとは申せません。今後想定される事態にも対応していく方策が必要かと思われまします。会として、将来を見据えたしっかりした活動を進めていきたいと思ひます。

飯田前会長は、「ちよだ」（創立二十周年記念号）の巻頭言で、「今日より明日への、もう一つの夢は、会員三〇〇名体制の実現である」と語っておられました。私達の吟活動の支えは、「常に夢（目標）を抱く」ところにあるのではないのでしょうか。自分自身の吟力向上への精進をとおして、あらゆる機会に「吟友呼び」の活動を進めていきたいと願っております。これこそ「夢」の実現であります。

「千代田」の名に相応しい磐石の会体制が、会員全員の手で築いてゆけるよう頑張つてまいりたいと思ひます。皆様の絶大なるご協力をお願いいたします。



平成十九年度

千代田岳精会組織体制

一、組織、機構の改編

ア、部職の改編（解消、再編）

○「指導運営本部」の解消。

○「業務連絡会」を「業務推進委員会」に再編。

委員会構成は各部門リーダー及び教場、分室代表。

○「コンクール部門」を「研修部門」へ吸収

○「躍進啓発部門」を、定期的に実施する「初期者研修」へ移行。

○「千代田の明日を語る会」を解消、「業務推進委員会」が引継ぐ。

○「研修部門」の中に「歌唱」「剣詩舞」研修の設立枠を設ける。

イ、部職の新設

○「最高顧問」「常任顧問」

○「会長補佐」（他役職兼務）

二、会議、研修

○「幹事会」「月例研修」は毎月の第一火曜日に開催。

・「幹事会」メンバーは役員・部門リーダー・研修リーダー・正副教場長・分室長・正副業務推進委員長・本部役員

・「月例研修」は右記に顧問が参加する。

○「業務推進委員会」は毎月の第三木曜日に開催。

（平成十九年一月より）

○会長	鈴木 龍成
○副会長 (会長代行)	大熊 龍清
副会長	耳塚 昇風
○会長補佐	菅原 琴風
同	菅原 克風
同	城戸 稲山
同	酒井 帆山
同	徳本 順山
同	山口 隆山
○最高顧問	飯田 精鷹
○常任顧問	磯田 龍真
同	岩崎 龍慶
同	吉川 龍鐘
同	林 龍吾
同	村上 恒風
☆部門リーダー	城戸 稲山
○研修部門	渋谷 辰山
・詩歌研修	萩 裕風
・演奏研修	
(・剣詩舞)	
(・歌唱)	
○許証部門	徳本 順山
○事業部門	山手 英山
○吟楽部門	菅原 克風
○弘報部門	八田 玉山
○婦人部門	菅原 琴風
○総務部門	酒井 帆山
○経理部門	菊地 駿山
☆業務推進委員会	
○委員長	山口 隆山
○副委員長	八田 玉山

創立二十周年記念吟道大会

組織の千代田の結集力ここに！

一粒の吟の種子が、大きく育った姿を共に祝う「創立二十周年記念吟道大会」が会員全員が準備から当日の運営まで参加して、十月二十九日(日)新宿 明治安田生命ホールで華やかに開催されました。

その状況は、鈴木龍成実行委員長が委員会報告で述べられていますが、三百四十余の客席はご来賓と、百七十名の会員を合わせて一席の余裕もない盛況でした。

宗家をはじめとし、全国大会でしか拝聴出来ない多くの超一流の吟に接する、得難い機会でしたが、全員が何かを担当しており、ゆっくり堪能出来なかったのがちよつと残念でした。

練り上げた内容に、お客様も興味深く長時間お付合ひ下さり、舞台上に上がった会員一同感謝しております。

閉会後の祝賀懇親会は新宿京王プラザホテル。ご来賓、会員合わせて二〇三名は心地よい疲れを、豪華な料理とお酒で癒やし、余興も盛り上がって大満足で長い一日は終わりました。

各委員さん、当日の係担当の皆さん本当に有難う。ご苦労さまでした。

なお、男子チーム五十五名が参加した全国吟剣詩舞道大会は、見事初入賞を果たし創立二十年に花を添えました。(詳細後報)

創立二十周年記念大会
実行委員会報告

実行委員長 鈴木 龍成

平成十七年二月初め「千代田岳精会創立二十周年大会」に向けての「プレ委員会」発足をもち、以後委員会を毎月開いて切られた。以後委員会を毎月開いて、「会員総参加」の大会実施を旗印に掲げ、アンケートによる会員意見の収集、その具体化が進められた。

会場の確定、日程の調整は予想外に手間取ったが何とか克服し「平成十八年十月二十九日本番」に向けてのゴーがかけられた。即、教場吟などの準備がスタートしたのは言うまでもない。

大会メインは「構成吟」だ。何をテーマにするか、これもまた幅広く意見を徴収しプロジェクトが組まれた。会の成り立ちの歴史から「江戸」を取り上げ、折しも「江戸五百年」が話題となっていて年であればこれだという事から「大江戸五百年」がテーマとなったのは正しく格好の設定であった。その後は一瀉千里、各教場の意見を調整しながら構成吟が組み立てられていった。喧々囂々の場面もあったが何とか乗り切った。

大会と併せて、将来に残る記録をとるということして「ちよだ」の特別号(創立

二十周年記念号）も発行された。懐かしい写真、記事などが、会員に二十年の歴史を理解させてくれた。

営々と続けられてきた一年半有余の準備期間は、月を追ってムードも高まり、いよいよ本番の日を迎えたその日、家元、宗家を始めとする本部役員の皆様、近隣会長、支部長、教場長の諸先生や多数の吟友同志のご来駕には、会員一同心から感激のお出迎えをしました。

大会は、全員の結集により「記念大会」から「祝賀会」までスケジュールどおりの見事な運営が展開され、午後八時をもって全てが終了となった。本当にご苦勞様でした。

構成吟プロジェクトを担当して

清水教場長 村上 恒風

忘れようにも忘れられない、”千代田“創立二十周年記念大会の日。延々二時間余に及ぶ構成吟の幕を閉じたその時「ヤレヤレ、これで無事終わった！」と安堵の胸を撫で下ろしたのは、私一人ではなかっただろうと思います。前日のリハーサルでは連繫プレー必ずしも上手からず、果たして明日はどうなるかと夜も碌々眠られませんでした。たが「案ずるより生むが易し」一番では真に円滑な舞台運びで終始できました。これも全員参加の千代田側とホール側の呼吸がピッタリ合った賜物とし

か言い様がありません。

さて、今回の構成吟については、前から江戸を主題にすると伺っており、”千代田“に相応しいテーマと共感していました。ところが、いざ蓋を開けると、何と私にプロジェクトリーダーのお鉢が回って来てしまいました。私にとって縁の深い東京とは言え、江戸についてはズブの素人。戸惑いました。が、反面研鑽の機会を与えられたものと自得し、前向きにお引受けすることになりました。

最初で最大のハードルは構成吟のストーリーをどう組立てるかでした。そこで色々調べている中に、その時代、江戸の人々は、武士も町人も実によく学び、よく遊んだという印象を強く受け、学と遊を二本の柱に筋建てをし、年初の第一回プロジェクト会議に諮り、ゴーサインが出されスタートの運びとなった次第です。

それから十月まで二十回にも及ぶ会議を開いて内容を煮詰めて参りました。その中で各教場別の分担区分と吟題を決めるのが二番目のハードルでした。甲論乙駁、口角泡を飛ばしてやり合った事もありましたが、最後には、お互い小異を捨てて大同に就くことが出来幸いでした。

三番目のハードルは二時間にも及ぶ長丁場を如何にしようかという問題でした。が、それも他の番組をカットし、”千代田“の全員が構成吟だけに集中出演することでクリア出来しました。最後のハードルはナレーションで、

た。ストーリーとの関連で、私がた、き台を作ることにになり、江戸を肌身に感ずるために、その頃の史跡を次々に尋ね歩き回り、多くの知見と感觸を得ることができ、足で稼ぐことの大切さが身にしみた次第です。

総じて今回のプロジェクトは、多くの方々のご協力とご声援なしには全う出来なかったと感じております。それ等の方々に深謝申し上げ本稿の締括りとさせて頂きます。

どうも有難うございました。



全国吟剣詩舞道大会合吟コンクール に男子チーム初入賞

創立二十周年を記念して、男女2チームが出場を目指しましたが、五十五名の壁に女子が断念し、結局男子チームの出場となりました。平成十一年の初出場では入賞に達しなかった雪辱を期し、林龍吾コンクール部門リーダー、岩崎龍慶副会長の指導で延べ十九回の練習を積み挑戦しました。練習に人数を揃えるのに苦勞はありましたが、回を重ねる毎に向上を示し、一体感が醸

入賞！感動と安堵

ハザマ副教場長 城戸 稲山

平成十八年は、独吟コンクールで始まり合吟コンクールで終わった年でした。前半は七月の全国吟詠コンクール、東日本大会出場までは、課題吟「海南行」を、後半は十一月十二日の全国吟剣詩舞道大会合吟コンクール課題吟「清明」の練習で終わりました。

千代田創立二十周年を記念して、男子チームが七年振り、二回目の武道館合吟コンクールに挑戦しました。岩崎龍慶、林龍吾両先生より十九回の特訓を受け、初めはバラバラだった会員の氣持が後半は一つにまとまりました。

四回目の練習の時、先導を務める様に言われ、氣軽な氣持で引き受けたものの練習を重ねるうちに先導吟の責任の重大さ、入賞しなければというプレッシャーから指導された先導吟が出来ず、自信の無いまゝ、当日を迎えました。

早朝七時前、靖国神社大鳥居前に飯田会長以下出場者五十五名全員が集合。

練習を行ない、家元・宗家先生より先
 励の言葉を戴き、特に宗家先生より先
 導吟についての温かいご指導に、肩の
 力が抜け自然体で舞台上に上がりました。
 先導のあと「雨纷纷々」と力強く揃っ
 た合吟で一氣に吟じ終えました。十六
 時、舞台上に上がり成績発表。入賞二十
 五組が次々と呼び上げられ、四十二番
 「清明」岳精流日本吟院千代田岳精会
 男子と呼ばれた時は、安堵と感動で胸
 が一杯になりました。熱心に指導して
 頂いた両先生、そして心一つにして
 吟じた吟友に感謝、又感謝！
 千代田の吟友と毎年行なう海外吟行
 会。今年は九月中欧三都を旅行。ハン
 ガリーの首都ブダペストでゆったりと
 流れるドナウ川岸で三名の吟友と「清
 明」を何度も練習した事が、楽しい思
 い出となりました。

初めて、武道館の舞台に立ち、全国制覇の栄光を手にした幸運のお二人より感激の寄稿を頂きました。

武道館合吟コンクールに出場して

丸の内第一
岩崎
桂山

吟を始めて十年、初出場で優勝の幸運を頂き、この上ない喜びです。「優勝三十三番岳精流日本吟院女子」の発表に私達は皆「ワーツ」と歓声を上げながら手を取り合って喜び、また同時に何か熱いものを感じました。

吟題は「清明」杜牧作。私の好きな吟です。七月より十数回渡精華、前澤龍淳両先生のご指導を受け、厳しかった特訓が走馬灯の様に頭の中をよぎり途中体調を崩し声も出ない時がありました。練習日は休む事無く通い続けました。五十五名が心を一つに、一体となつて吟ずる事の難かしさ、何回も何回も同じ所を指摘されながらも最後には全員の気持が一つになったと私は感じましたが、先生のお顔は当日まで厳しく、まだまだ精進が足りないと感じました。

今大会の出場という貴重な体験をさせて頂き感謝の気持ちで一杯です。今後はこの経験を糧に頑張つて吟道に励みます。ご指導頂いた両先生、吟友の皆様、有難うございました。

合吟コンクールに優勝して

丸の内女子 本多 敦子

平成十八年十一月十二日。全国吟剣詩舞道大会合吟コンクール優勝。生涯忘れる事の出来ない輝かしい一日になりました。三位、二位と発表され残されたのは優勝のみ。今にして思えばほんの僅かな時でしたが、これ迄経験した事の無いほどの緊張感で胸が張り裂けそうでした。

いよいよ発表、「優勝岳精流日本吟院女子」と告げられ滲み出る涙、思わず立ち上がり辺り構わず大歓声。お仲間達と手を取り合って喜びを分かち合

いました。

顧りみまずと、夏の暑い盛りから約五ヵ月間、特訓に次ぐ特訓。渡先生、前澤先生の熱心な指導の下に、心を一つにして優勝を目指して練習を重ねて来た事がこの結果に繋がりました。渡先生からは、時に厳しくてもその後は必ず優しく力づけ、希望を与えて頂きました。前澤先生からは、明るく楽しく躰を張っての特別の発声練習を教えて頂きました。

また、陰で何かとサポートして下さっていた方々のお力添えもあってこそ優勝する事が出来ました。

金メダルの重さ、今しみじみと感じています。何事に於てもお陰様の気持ちを忘れる事なく「礼と節」「吟友との交流」を計りつつ、練習を重ねて行く事が、メダルを頂けた意義とっております。コンクールに出場させて頂けた事は、私にとって大きな大きな財産になりました。



◎ 平成十八年度昇伝者

おめでとうございます (敬称略)

奥伝

丸の内第二 勝田 賢風
同 杉野 統風

この他、皆伝師範一名、奥伝師範三名、中伝準師範十六名の方々が合格されております。

奥伝受験記

丸の内第二 勝田 賢風

十一月三日文化の日、三年振り昇伝試験である。日頃の練習不足もあり、全く自信も無く試験会場に向かった。会場には多くの千代田の吟友が揃っており心強かった。しかし、審査を宗家先生が担当されると聞き、一気に緊張が高まってしまった。受験番号により吟題は「山居」と決まった。不十分ながらも練習段階では、どうにか暗譜で吟ずることも得たが、やはり不安が残っていた。つい左手に詩文を持ち、時折目を移しつつ吟じ終えた。

後の講評の席上「コンクールとは違い、審査の場合はたとえ絶句しても暗譜して吟ずる方を評価する」と厳しいご指導をいただいた。吟は味わいがあって良かったとお誉め頂いたが、基本的姿勢をご指摘頂いたと肝に銘じた次第である。

入会以来、歳月こそ重ねては来た

中身はかなり抜けており、奥伝など面映ゆく、僭越の極みと言うのが正直な心境である。然しながら奥伝の資格がいただけたなら、今後は動かさること「山」の如しではなく、疾きこと「風」の如きフットワークを駆使して会の為、お役に立ちたいと殊勝にも考えている次第である。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

奥伝審査を受験して

丸の内第二 杉野 統風

時の流れは全く早いもので、入会して「アッー」と言う間に十六年を経過し奥伝審査を受験する事になりました。詩吟については前にも寄稿したと思いますが、中学時代に「軍事教練」の時に教官から指導され、ほんの一瞬ではあります。吟じた事がありました。その後終戦となり、習う機会も無く学校を卒業し、会社勤めに専心退職を迎えました。偶々会社で詩吟の会が有るのを知り入会した次第です。

最初は飯田会長の指導で厳しい指摘を受け長続きするか懸念されましたが練習の後の楽しみでここ迄来れたと思います。その内会員の増加により、新劇場が誕生し、小生は岩崎先生の丸の内第二に配属となり今回の受験に至りました。その間先生には不肖の弟子で色々面倒ばかりをかけたと思います。扨て、審査の方ですが、審査員は宗家で相手にとっては不足なでした。

愈々本番となり今迄習った事を充分に發揮出来たと思います。只講評の時に一言「吟は非常に良かったが譜面を見ずに吟ずる様にしなさい」と注意をされ、今後の課題となりました。何はともあれ今日まで吟じてこられたのは諸先生のお陰と、仲間の皆様との交流だと思ひ感謝で一杯であります。今後は千代田岳精会の発展に努力したいと思ひます。

奥伝師範を受審して

鎌ヶ谷分室長 荻 裕風

昨年の奥伝受験に続いて、今回は奥伝師範を受審させて頂きました。昨年もより更に体調不良で、会場に行くのが心細かったが、中伝準師範受審の植村太山副分室長が自宅から同行してくれ、無事会場に到着出来ました。

例年にも増して全国から集まった皆さんの熱気を感じ、家元・宗家のご挨拶の後、審査が開始されました。筆記試験は、事前の勉強会で教わった事が役立ち第二問以外は思うように記入し、起句より吟題と作者を記す問題に掛かりましたが頭が混乱し始め、一時間経過で皆さん提出して、誰も居なくなり焦るとなほ混乱してその促提出し悔しい限りでした。

午後の個人面接は昨年と同じ佐々木精穂先生。二十周年大会ご来会のお礼を申し上げ、先生からは「教場を開か

れたそうで、大変でしょうが頑張ってください」の一言で終了しました。岩崎先生や吟友と慰労会を楽しみ、何故か家元の今年度指標の「氣力」を心の中で繰り返しながら植村さんと帰途に就きました。

中伝準師範に合格して

神田教場 尾張 栄山

今年は、私にも中伝準師範を受験する資格が出来たので、勿論受験するつもりでいましたが、その為の勉強は何もせずに過ごして来ました。

十月に、飯田会長の受験指導がある事を知り、試験問題や試験の様子を前年度受験した人に聞き、このままでも何とかなると思い気軽に参加しました。その結果は記憶にあやふやな所が多く、もっと身を入れて勉強する必要性を感じて改めて勉強し始めました。処が歳のせいで、覚えることが遅く忘れる方が早いので、勉強が進まず、このままでは恥ずかしい成績が得られるか不安な気持ちで十一月三日の試験を迎えました。

当日は冷静なつもりだったが、やはり上がっていた様で、吟題の作者選びでは頼山陽の有名な「鞭声」が出ていたので、直ぐ分かったが「述懐」も同じ作者なのに出てこなかった。吟譜の書き入れは何度も吟じた「山亭夏日」だったので、正確に出来たと思う。

面接は、知らない先生でなく、池袋カルチャーで七年前から指導して頂いている宗家だったので気楽に面接を受けられました。その結果、今回合格の通知を頂き安心すると同時に、今後は準師範の名を汚さない様に吟力の向上とその知識を深め、また後輩の指導や吟道の発展のため努力していきたい。

準師範受審を終えて

清水教場 徳本 順山

私は、ゴルフ以外に何か趣味を持ちたいとの好奇心から、三十代は謡曲、四十〜五十代は小唄と下手の横好きを続けて参りましたが、平成九年二月、会社の先輩に誘われ詩吟に入門し、アツと言う間の九年間でした。

当初は軽い気持ちで、いつ迄続くか不安でしたが、家族から「小唄なんかよりに聞きやすいよ」と冷やかされ、その氣になって今日に至りました。教場では飯田会長、磯田会長代行から直接ご指導戴いたお陰で、終生の友として詩吟が定着しつゝあります。

これもお世話下さった教場の先輩や千代田の皆さんのお陰と感謝に堪えません。

このような中で、この度準師範受審を迎え、十一月三日、吟友仲間と共に試験に臨みました。千代田では事前に傾向と対策をご教授頂いておりましたので何の不安も無く、無事終えること

います。私は準師範の伝位を機会に、
流統の原点である「真善美」の精神を
拳拳服膺して「更に上る一層の楼」の
気概を持つと共に、地に足の着いた吟
を目指したいと思っています。
今後とも諸兄の一層のご指導をお願
い申し上げる次第です。

師範と言う名の重み

丸の内第二 八田 玉山

流統より人様に指導の出来る準師範
という肩書を頂いた。広辞苑を引いて
みると、師範とは「手本、模範。学問
・技芸を教授する人」とある。はて？
呑気に吟を楽しむ段階にどっぷり漬か
っていた私に手本、模範吟をやって教
えることが許されたことになった訳で、
その立場に立つかどうかは別として、
改めて吟道の基本を見つめ直し、知識
と技法をしっかりと身に付ける機会に
したいと思います。「教える事は、学
ぶ事の半ばなり」と申します。説明や
説得を理解納得して貰うには、数倍以
上の基礎となる知識がないと迫力に欠
けるでしょう。私も多少物覚えは悪く
なりましたが、まだ教えて頂いたこと
を吸収出来そうです。これ迄にも増し
て頑張りますので、ご指導を宜しくお
願い致します。

地域の役員で忙殺されて、在職時代
の趣味、ゴルフ、麻雀、碁が遠くなっ
ている今日、唯一の楽しみとして、吟
を続けられる事は嬉しい限りです。

年男。年女

今年の干支は丁亥です



大正、昭和、平成

ハザマ 遊佐 峰山

私は、大正十二年亥年生まれで今年
八十四歳になります。大正・昭和・平
成の三代に亘って生きてきたわけで
すが、戦争の惨禍、戦後の混乱等々を
くぐり抜け、よくもここ迄きたものか
と感無量のものがあります。

昭和十一年群馬県立前橋中学校に入
学し「質実剛健」「気宇雄大」の校訓
のもとで学びましたが、二年生から四
年生の間、週二時間の漢文の時間があ
りました。先生が漢詩を諄々と教えら
れ、それを理解し素読し、月三回位は
三十分程先生の指導で五十名で合吟し
ました。

また昭和十八年、学徒出陣で海軍予
備学生となり満州旅順の予備学生教育
部で厳しい教育を受けましたが、毎日
号令調整の訓練があり、旅順港に向か
って最大の声を張り上げました。以上
のことが私の今日の詩吟の基礎になっ
たのかも知れません。

平成九年ハザマ教場が発足し、今年
三月に十周年を迎えます。よき教場長
に恵まれ、教えて頂いた吟の数はゆう
に一〇〇を越すと思います。楽しく吟
を続けてきました。発足時は十三人

したが入退会があつて現在二十七名の
大所帯になりました。就中、大正生ま
れの十名が相変わらず頑張っているこ
とは誇りであります。

私達は吟を愛し、楽しみ続けると共
に、教場会員の増強を計るために、ハ
ザマOBは勿論のこと、新たな分野に
も拡大することを含め、些かでも貢献
出来ればと思っております。

吟との再会

ハザマ 中川 睦山

亥年の新年メッセージとの依頼で、
猪との共通点を探してみても何もない。
猪突猛进など一度もない。酒の勢いが
弾みの猪突爆沈の失敗は幾らでもある。
大正十二年一月生まれで、その年の
九月の関東大震災も大阪育ちで被災を
免れた。六巡目平成七年の亥年。阪神、
淡路大震災も実害なし。三度目の正直
で次の亥年に何が起つても、被害など
受けるわけがない。但し今年の亥年は
何も起らない言う条件付のことである。
去年十月の「創立二十周年吟道大会」
に出席して千代田岳精会に籍を置く誇
りを抱いたのは私一人ではない筈であ
る。素晴らしい内容で感激した。

吟との再会には思い出がある。確か
中学三年の頃だったか、学校の近くに
毎週JOBK（大阪放送局）から放送
されていた詩吟の先生が住んでおられ
た。学校からの依頼で指導をお願いす
ることになり、毎週二回弁論部員が受

講した。神州流 村上昇風先生。それからというものは、放送を聞くのが楽しみで、ラジオから流れてくる先生の吟声を誇らしげ聞いたものだ。先生のお口添えで大阪府かの中学対抗吟詠大会に何度か出演したが遂に無入賞で終わった。以降学生時代、参戦、復員、ハザマ勤務を経て、平成九年三月ハザマ教場新設と共に六十六年振りに「吟」に再会、今に至っている。飯田精鷹会長、鈴木龍成教場長と昔の村上先生と重なって、人生これ吟なり「を実感。重なりと言えは、中学時代の大会で甘味の不足がちなあの頃、お土産に貰った紅白の饅頭と、二十周年「での紅白饅頭が「吟との再会」を祝ってくれてる様で嬉しかった。年頭に当たりこれから精進しますので宜しくご指導下さい。

専心

東陽町 前田 道山

入会してはや十一年余。親切なご指導と同僚の励ましに支えられての今日である。

生活はひたすらに吟道と言えましよう。吟ずる為の俳句、短歌作りに努め、漢詩研究のカルチャーに参加している。併せて自作を吟詠するピアノ弾き詠いも楽しんでいきます。句会・歌会。演奏会での詩吟も好評でした。過日台湾で大会があり現地作家の作品を吟じました。会場の方々に涙して握手を求め

られ、肩を抱かれて感動の刻を過ごしました。総合芸術としての詩吟の世界を改めて受けとめました。宗家ご指導のカルチャーも有難い勉強の機会です。美術鑑賞も詩情表現に大いに役立っております。夫々が趣味とも言えましようが、私にとって全てが詩吟世界に繋がってゐることに意味があります。

今年もまた、吟友と恒例の「世界遺産を巡る詩吟の旅―第八回」で中欧を廻りました。今迄旅した先々での吟詠に尽きぬ喜びを感じています。トルコの野外劇場、アンコールワット、ポンペイ、カッパトキア、メコン川、万里の長城等々。いつしか十数カ国で吟じていたのです。後も仲間の健康が許される限り続けていく事になりましよう。詩吟を通して終生の友を沢山得ましたこと、私にとってかけがえのない宝物です。古稀の心情を一句に収めて筆を置きます。

受け身にて
生きさらすまじ 寒椿 道人



干支について

ハザマ 山本 忠次

今年は年男という事で、何か出筆を依頼がありました。が、さて何を書いたらと悩みました。

人から貴方は何歳ですか？と皆さんも聞かれる事があると思いますが、そんな時の答えは、小生は「亥年」ですと答えるだけです。本当の干支は乙亥（きのとい）と答えるのが正解だと知りました。そこで干支について調べる事にしました。

干支は、十干と十二支を組合せたもので、十干十二支、天干地支の略。十と十二の最少公倍数は六十なので干支は六十期で一周するので六十干支とも言われています。まさに還暦です。起源は古代中国であり、様々な所に用いられて来りました。

一般に「えと」と言う場合、十二支と同義とされるが、厳密に言うとは誤りだそう。ここで皆さんにご存知だと思いますが参考のために、干支の求め方を示します。あらためて皆様の干支を確認してみられるのも新年の遊びの一つかと思ひます。

今年「丁亥」（ひのとい）です。

○干支の求め方

西暦で表わした年数を(10)で割った余りを求め、十干を割りだす。

余り	0	1	2	3	4
十干	庚	辛	壬	癸	甲
余り	5	6	7	8	9
十干	乙	丙	丁	戊	己

同様に西暦で表わした年数を(12)で割った余りを求め、次表から十二支を割りだす。

余り	0	1	2	3	4	5
十二支	申	酉	戌	亥	子	丑
余り	6	7	8	9	(10)	(11)
十二支	寅	卯	辰	巳	午	未

(千支一覧も添付されていましたが頁数の関係で割愛いたしました)



年男を迎えて

ハザマ 丸山 育人

私は、健康と職場に恵まれて、幸いにして満六十八歳の九月まで勤務する事が出来ました。昨年古稀を迎え、自分では、まだまだと思っていたのに、急に高齢者の仲間入りさせられた様な感じがします。これからは肩肘を張らず無理をせず、折角掴んだ熟年の時代を楽しみ「元気で、爽やかに生き抜こう」をモットーに、老化防止の手段として、日常の運動不足による足腰の衰えを無くすために、ウォーキングをして頑張っております。

ハザマ社友会の歩こう会で、詩吟同好会の中川睦山さんが、港区のコンクールで優勝された紹介があり、早速素晴らしい美声で吟詠された。私も前から詩吟に興味があり、即入会の手配をして頂き、入会することが出来ました。練習を重ねる毎に奥が深いと感じております。常に謙虚な気持ちで、真面目に肩の力を抜いて腹の底から声を出して笑顔で楽しく詩吟と取組み、いつまでも健康で現役でありたいと願っておりますので、今後とも宜しくご指導の程お願い致します。

年女新年メッセージ

銀座分室 高橋 道子

平成十七年二月、本荘麗山さんに勧められ吟を始め、ひたすら先輩方に近付こうと続けてきました。先日のご指導で「吟題から大きな声で、ハッキリと発音しなさい。節調はそれからです」と先生から注意を受けました。それなら体力に自信のある私にも出来る。かもしれない。という訳で、私のこれらの一年は「初心に帰る！」です。実は、愛車のバイクも二〇代の頃と同じ車種になり、初心に帰ります。先生や先輩方のようにいつ迄も若々しくいられるよう、もっと勉強して、深みのある吟を長く続けていきたいと思っております。年女の記念に今年は独吟コンクールにチャレンジします。これからも宜しくお願いします。

清水教場創立十周年記念大会

清水 星野 久山

五月二十二日、芝弥生会館を会場として清水教場創立十周年記念大会が開催された。

横山精真宗家、千代田岳精会磯田龍真会長代行、岩崎龍慶副会長を始めとし、各教場長、清水建設清友会白井東京支部長など多数のご来賓をお迎えして午前十時祝典を開始。引続き吟詠会に進んだ。教場全会員に名古屋からの特別参加もあり、ご来賓各位の模範吟、特に宗家からは「桜台楼主五十九歳台桜を賞す」という自作の絶句まで披露された。最後に出席者全員の大合吟「富士山」、振幣寿詞で十二時半お開きとし、場所を移しての懇親会は隅田川に屋形船を浮かべての野趣あふれる趣向。酒杯の交換からカラオケ大会にまで盛上がり、あっという間の三時間で賑やかな幕引きとなった。



星野 久山 (清水)

漢詩（八）

清水 西川 宗山

登 高 杜 甫

風急天高猿嘯哀 渚清沙白鳥飛廻
無邊落木蕭蕭下 不盡長江滾滾來
萬里悲秋常作客 百年多病獨登臺
艱難苦恨繁霜鬢 潦倒新停濁酒杯

唐の時代、陰曆九月九日、重陽の節句には、親しい人達が集まって山や丘に登り酒宴を催す習慣があった。これを登高と言う。この詩は、杜甫が世情不安と食糧難のなか喘息、神経痛、糖尿等の持病と闘いつゝ、雲安、キ州（衝陽一帯を転々としていた頃にキ州（四川省・奉節県）における作で、親しい友も無いまゝ、独り長江を望む台上に登って詠じたものである。

「通釈」風は激しく吹き荒れ、秋の空は高く澄み、そして猿の鳴き声が悲しく響き渡る。見下ろせば長江の岸辺は清らかに透きとおおり、川砂は白くその上を鳥が輪を描いて飛んでいる。果てしなく広がる林の落葉は、ざわざわと音を立て乍ら落ち、尽きることの無い長江の水は湧きかえる様に流れてくる。遙か万里も故郷を離れてこの悲しい秋を迎えた私は常に旅人の身であり、一生の間病氣ばかりしているこの体で、今たった一人この高台に登っている。

「勞を重ねて真白になったわが髪がくづく嘆かわしい。年老いて衰えた為、せめてもの楽しみであつた濁り酒すら近頃では止めなくてはならなくなつたが、いよいよ投げやりな気持ちにならざるをえない。」

「考察」登高は七言律詩の詩型で七言の八句からなっている。この詩の前半の叙景は、もはや単なる秋景色では無い。吹き荒れる風、晴れ渡る空、散り続ける木の葉、湧き返る長江、そして猿と鳥、すべて作者の心眼を濾過されることにより限りなく悲壮な心の鳴動となつてゐる。後半は心境の告白となるが、前半に對する注釈・説明という印象が無いでもないように思われる。今に伝わる杜甫の詩文集は、千四百五十首余りの詩と、三十篇余りの散文があるようであるが、その内千四百首ばかりは今体（きんたい）とよばれる五、七言の律詩と絶句であり、余りの四十数首が古体とよばれる五、七言の長詩である。



『新会員紹介』
◇丸の内第二教場（草加分室）
菊池 幸子さん（七月入会）

名取佳泉さんのお友達で、いつもイタリアブランドの洋服で現れる素敵な方です。優しい子、孫に囲まれ幸せな環境で、これからは健康に氣をつけ、好きな漢詩を大きな声で吟ずる事を楽しみにしておられます。

◇東陽町教場
勝村 忠三氏（十月入会）

N 自動車のトップセールスマンを脱サラし、いろんな事業を手がけた末神楽坂に飲食店を経営し、こまめで面倒見のよい人柄で、現在同商店会の副理事長をしています。近年店の経営をご子息に任せ、ご隠居の身になったので、趣味の幅を広げる意図で入会されました。「神楽坂阿波踊りの会」の実行委員長を務める大変幅の広い粹人です。

◇東陽町教場（鎌ヶ谷分室）
柳川 交司氏（十月入会）

鎌ヶ谷開設直後、荻分室長と在職中机を並べていた親友の同氏が明和会のHPで知り、九月に來会。高校・大学時代陸上短距離で名を馳せたスポーツマン。知る人は皆大歓迎です。世話好きで人望厚く、趣味も書碁、将棋と多才、美声に加えて研究熱心な大型新人です。

◇清水教場
船津 英世氏（六月入会）

生まれは神奈川県。最近凝っている趣味は囲碁位（五段程度か）対局後仲間と一杯飲むのも楽しみ。望月先輩、同期の徳本、山田君が熱心に勧めることであり、自分としては声量も無く、向いているとは思われないが入門を決心。やってみると結構面白そう、頑張ってみたい。

◇ハザマ教場

丸山 育人氏（五月入会）

ハザマOBの会で萩原晴泉さんの誘いを受け「親戚、家族の前で披露出来るのはこれだ」と積極的に入会夫人の母堂の勧めもあったとのこと。学生時代硬式野球で鍛えた体で、吟に合った逞しい声。趣味の海外旅行（世界遺産巡り）に、吟詠旅行？が加わりました。

浦谷 政夫氏（十月入会）

鈴木教場長の学友で、ある日一杯やっている間に吟談に花が咲き「やってみよう」とトントんと入会。早くも独吟で堂々と発表。意欲満々。永年短歌サークルで腕を磨いている文学熟年でもある。ゴルフも安定ペースで楽しんでいるとのこと。

石田 勝美氏（十月入会）

かねがね、発声は身体に大変良いとの話を聞き、萩原晴泉さんの紹介で入会。漢詩にも大変興味があり、詩を吟にどう表現するのか挑戦したいとの抱負を持っておられます。奥様と犬一匹の生活のなかで、ゴルフ、釣り、油絵、書、篆刻と幅広

く生活をエンジョイされています。

鈴木 政夫氏（十二月入会）

紹介の前田達泉さんとは、社内詩吟同好会で研鑽の仲間。久しぶりにあったハザマOB会の席上、前田さんの熱心な説得にあい入会決意。ゴルフ、麻雀と趣味を楽しみながら、女子新体操“全日本チャンピオン級のお孫さんの活躍を期待する毎日です。

◇丸の内女子教場

新島 悦子さん（五月入会）

在職中経理部所属の先輩です。新宿の街でバツタリ出会い、双方でびっくり。私が教場長と聞き、彼女も吟を習った経験あり、積もる話に花が咲き入会をお勧めしました。税理士を止めたらとの約束したのが一年前でした。吟の心、漢詩に興味がお有りの明るく楽しい方です。

◇新宿教場

真山 尚子さん（六月入会）

千葉県の水郷地帯佐原出身です。趣味はガーデニングと自然を親しむ事が好きで野山散策です。専業主婦二十年の後、会社勤めを始めて二十年、今年三月末、定年退職？しました。これからは、ゆっくり名所旧跡巡りして行きたいです。吟も頑張ります。

波治 郁代さん（六月入会）

杉並区にお住まいの、明治安田生命のバリバリの現役です。特技のカラオケは、和田アキ子も顔負け（石

人です。聞いた人は皆一様に口あんぐり、びっくり仰天。真山、小柴さんと元氣印三人娘の入会を皆喜んでおります。

小柴 ふじ子さん（七月入会）

明治生命の頃の友達から詩吟を誘われ行ってみると、知合いの方も居られ、皆さんとびきりの笑顔で迎えて下さり、初めて発声から詩吟を習い、食事、お茶までご馳走になり、一日楽しく過ごして帰って来ました。先輩の細い身体から出る迫力のある声にびっくり。以来四カ月、少しでも先輩のように声が出せるよう楽しみなが頑張っています。皆様宜しくお願いします。

◆穴倉 虹風さん（丸の内女子教場）

十一月二日逝去されました。享年六十六歳。女子教場副教場長として多大な功績を残されました。謹んでご冥福を祈ります。

編集後記

創立二十周年記念吟道大会は、大変高い評価を頂き、大成功裡に終わりました。全員参加の企画運営見事なものでした。この時に千代田創設の大業をなされた飯田会長が勇退され、鈴木新会長か後を継がれます。飯田会長、長い間のご指導有難うございました。後を引受ける新スタッフ一同力を合わせて取組みましょう。（八田）